

## リンゴ国際競争時代をにらみ、「取得するコストより取得しないリスク大きい」と判断 青森のリンゴ農家が相次いでGAP導入

リンゴの輸出量が伸びている青森県で、GAP取得しようという農家が増えている。農産物の安全管理を保証するシステムであるGAPを武器に、低迷するリンゴの国内消費を輸出で打開し、リンゴ産業の活性化を図りたいという産地の思いが背景にある。



片山りんごがユーレップギャップの審査を受けている様子。

NPO法人日本GAP協会によるJGAP認証を取得済みだ。来年中には60名全員が取得をめざしている。

一方、台湾を中心に輸出しているJAつがる弘前（弘前市）は今年からGAPに取り組み、今夏に2名の組合員が審査を受けることになっている。その後、JGAPのなかでも「必須」とされる重要な項目については、「JGAP指導員」の資格を持つ8名の職員が全組合員に普及していく計画だといふ。

同県で初めてGAPを取得したのは片山りんご（旬）（弘前市）。1999年からEUに輸出を開始し、2004年にEUで普及しているユーレップギャップの認証を取得した。同社がリンゴの生産を委託している岩木山りんご生産出荷組合では、すでに3名が

ここ10年、リンゴの国内消費は低迷している。1989年産の青森県産のリンゴの販売額は初めて1000億円の大打を突破した。その後、98

年産の1047億円をピークに減少し、05年産は約780億円にとどまっている。

一方、輸出は伸びている。06年産の国産リンゴの輸出量は約2万2000t（金額では約68億5000万円）で過去最大を記録。このうち約90%が青森県産といわれている。同県では2015年までに3万tに伸ばす計画を立てている。

GAPはいまのところEUに輸出され、大手量販店で販売される場合に限って義務づけられている。EUに輸出実績のないJAつがる弘前がGAP取得に乗りだしたというのはそれなりの理由がある。

同JAは今年2月、ベルリンで開かれた展示会に参加した。同JAリンゴ課の石郷岡喜代昭課長は「日本産のリンゴは、EUで出回るリンゴと

比べて大玉で見た目もきれい。絵文字入りリンゴは、来場者の大半が関心をもった」と話す。だがそれゆえに「飾り物か」、「ホルモン剤や化学物質を使っているから大きくなっていいのかな」など疑われることもあった。「GAP認証があれば安全であることが一目でわかる上に、GAPを求めている国に対しても安全であることを証明できる」（石郷岡課長）と、輸出拡大のためにもGAPは有効と判断した。

ところで、取り組んでいる農家はどのくらいいるのか？ 06年11月に認証取得した岩木山りんご生産出荷組合の木村図氏は「審査前、農業などの保管庫の整理整頓に丸2日とられて手間取ったが、それ以外の作業内容は取得前とほとんど変わらない」と話す。GAPは生産・出荷の各段階

本誌125号GAP特集の別刷。農場管理の世界基準として日本政府も4月、全国2000産地での導入を求める施策を発表。本誌では先駆けて、世界のGAP動向、日本のGAP取得事例、JGAP取得のノウハウ、日本版GAP先導者の座談会を掲載。

FARMERS BUSINESS  
**農業経営者**  
 ギャップ  
**GAPで実現！**  
**顧客から信頼される**  
**農場管理**

GAP全国会議2007  
 in青森開催記念

### GAPで実現！顧客から信頼される農場管理

- 定価500円 ※送料100円
- 定期購読者 送料サービス
- 定期購読者限定・大口割引
- ・5~9冊 1冊450冊   ・10~19冊 400円
- ・20~49冊 350円   ・50冊~ 300円

※注文は綴じ込みハガキ/FAXで受付中

世界70カ国の約5万農場が認証を取得するまで成長したユーレップGAP。農場管理における事実上の世界スタンダードになっている。我が国では日本版GAP (JGAP) の普及が始まったばかり。本誌では、農場の経営管理手法そして国際競争に生き残るための規範として、GAPに注目。世界の動き、日本での進展を毎月報告する。レポートはジャーナリストの青山浩子氏。

において農場で守るべきルールである。GAPで求められていることはプロ農家であれば、当たり前前に実践していることで「特別難しいことは何も無い」と木村氏。木村氏は現在、出荷組合のなかで新たにJGAPを取得しようという農家の指導もしている。

一方、伊藤公正氏はJAGFが弘前管内のモデル農家として、今年JGAP取得をめざす2農家のうちの1人だ。GAPは、農場で起こりうる様々なリスクを排除することが基本となっているが、「IPM (総合病虫害管理) の手法も取り入れられている。病害虫の発生予察情報に基づいて防除すればいままで以上に農薬も減らせる」と伊藤氏は期待する。「当初は輸出のためのGAPと思っていたが、輸出に限らず農家にとって役立つ手法だと感じている」という。

GAPに対し、「輸出に携わる農家しか関係ないので」という声がよく聞かれるが、実際に取り組んでいる農家の考えはそうではないようだ。「GAPを取得した中国産のリンゴが日本に入ってくる

ようになれば、日本のリンゴは大きな打撃を受けることになる」と話すのは木村氏。伊藤氏も「取得することによって生じるコストより、取得しないことよるリスクのほうが大きい」と話す。世界中でGAPの認証農場が増えており、農産物貿易の一基準となりつつある。日本の農家だけがGAPから目を背けるわけにはいかない。青森県ではGAPに関する勉強会やセミナーが数多く開催されており、これらに参加した農家たちは、好むと好まざるに限らず、GAPを取得して武装するしかないという考え方に立っているようだ。



片山りんごとJAつがる弘前が出展したベルリンの展示会「フルーツロジスティカ」。

せでできるわけではなく、現状では大半が産地（農家）の負担になっているという点だ。

**GAPを取り巻く課題**

この点について片山りんご(有)の山野豊代表取締役は「取得費用の問題だけでなく、GAPをとりまくサブシステムが機能していない点が問題」と指摘する。

JGAPを取得するための審査費用は一農場当たり5万円前後といわれている。だが、それとは別に土壌、水質、残留農薬の各検査が必要となる(残留農薬検査は1作物あたり15万円前後)。また、使い終わった農薬の容器などは廃棄せず、安全な方法で処理する必要があり、このための処



岩木山りんご生産出荷組合の木村図氏。

理費用も新たに発生する。さらに山野氏は「GAPは生産段階のみならず卸・流通、小売まで含めた一貫システムとして機能すべき」としているが、一部の流通業者を除き、GAP取得のための費用を負担しているところはない。これらに対し山野氏は「食の安全を保証するシステムは公共財であり、政府の補助も必要ではないか」と話している。

国内消費低迷を打開する策の一つが輸出であり、そこにGAPが必要とあらば迷うことなしと一歩を踏み出した青森のリンゴ農家。グローバル化のなかで生き残るためには待ったなしの対応といえるが、費用負担、サブシステムの構築など早期に解決されるべき課題も多いといえる。



JGAP取得をめざして準備中の農家、伊藤公正氏。

JGAP ISAI  
GAP全国会議2007 in 青森  
第19回食・農・環境の情報ネットワーク全国大会  
安全と持続的農業で顧客に提供される新たな農業ビジネスモデル

同席者 入道勲利  
Agriculture Expo (農業・環境・技術)

日時 2007年4月20日 (水) 9:00-17:00  
場所 青森県立大学ホール  
主催 農業経営者会・NPO法人日本GAP協会  
共催 青森県、水産部農林水産部、秋田県、山形県農林水産部

**GAP全国会議 2007 in 青森 「参加資料+講演CD」500セット限定発売**

全国で一早くGAPを導入した生産者、農協、青果業者の実践報告をはじめ、専門家や行政担当者の講演の要旨をまとめた「GAP全国会議in青森」の参加資料(80頁)。主な報告・講演を収録したCD付き。目と耳でGAPの基本理解を深め、最新動向がおさえられる。GAPに関心のある生産者・関係者待望の資料CDセット。

■一般5,000円 ※送料100円  
日本GAP協会会員・「農業経営者」定期購読者  
■3,000円(送料サービス)  
発売：NPO法人日本GAP協会  
お申込：TEL:03-3251-0831  
FAX:03-3526-9494